

## 第 19 回環境 NPO リーダー海外研修 報告書

NPO 法人 こども環境活動支援協会

片山 翠

### ① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本の NPO として生かせるか。

今回の研修で私が感じたドイツと日本の一番大きな違いは、「社会で起こっていることを自分ごととしてしているかどうか」です。議論をよく重ねるドイツの方々には BUND や NABU のようなボトムアップ組織があることもあり「自分の声が社会を変える」、「自分も社会を担う一員である」という意識が根付いているように思いました。特に今回出会ってきたドイツの方々には自分自身が社会と関わっている接点から社会をより良くしようと情熱を持って行動しているように思います。行政の方でも、企業の方でも、BUND、NABU、地域グループの方々であっても、その目標や対象は違えど根本にある「社会をより良くしたい」という想いが感じられました。そしてそれを、自分の好きなことや分野などの楽しいことから広げていくことが、持続的に活動を続けられるモチベーションの原動力だと思います。

その気づきの上で、私がこの研修で学んで日本の NPO として生かしていきたいのは以下の 4 点です。

#### (1) 夢をもつ人の育成

子どもたちの主体性・自立心を育てるために、幼稚園と連携した幼児対象のプログラムの実施します。ドイツの 2 つ森の幼稚園では子どもたちの選択肢を広げることと先生方の待つ姿勢や注意の配り方を学びました。幼児対象だけで終わるのではなく、幼児の周りにいる大人へも影響をできるようなプログラムで保護者向け、先生向けのプログラムの構築をしていきたいと考えています。

#### (2) 共感と感動を与える資金調達

日本は寄付の文化が少ないと思われがちですが、寄付をする割合はドイツと大きく変わりません。信頼を得て活動に共感してもらうことができれば、環境保護団体でも寄付を得ることは可能です。またひたむきに真摯に情熱をもって、行政にも企業にも相手の立場にたった内部で提案しやすい事業提案を行います。関係する方々が関わってよかったと思えるように、対等なパートナーシップの構築をしていきたいと考えています。そして資金や時間、物など寄付をしてくださった方々へは感謝を伝えることを忘れてはいけません。

また、組織内の各担当がもっている個人情報データベース化、分析し次の4点につなげることも必要になってきます。

1. 新しい寄付者、会員を増やす
2. 減らさない
3. 長くいてもらう
4. コストを減らす

各事業担当者が寄付や会員を募ることに對して4つの意識を持ち動くための情報共有をしていきたいと思ひます。

### (3) ボトムアップの組織運営

この先の持続可能な組織であるために以下のことを各事業担当の職員に向けて提案が必要だと考えています。

1. 各事業の収支の分析と短期、中期、長期目標の設定
2. 各事業に関わる会員の方々の情報集約とケア
3. 目標に向けての資金調達方法のディスカッション

### (4) 広報活動

多くの人に活動を広く知ってもらうための広報活動の実施をこまめにすることが重要です。活動の見える化として年間プログラムの作成も生かすことができると思ひます。また、寄付者に対して寄付の使い道の情報開示や、組織に課題があつた場合の情報の開示の仕方など、ドイツのように日本ももっと真摯に人に答えなければと感じました。

## ② 研修を通して、日本の環境 NPO 活動を支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

日本の多くの NPO で直面している課題は様々ありますが、資金調達と長期的に見たときの未来を担う人材育成に焦点を当てて、以下の3つの仕組みが必要なのではないかと考えます。

### (1) FOJ 制度の導入

この課題を解決するために、ひとつはドイツで行われている FOJ のような制度を導入すべきだと考えます。ドイツでは18歳から26歳の若者対象としたボランティア研修制度を設けています。この制度では1年間福祉系や環境系の活動を、生活費などのお金ももらいながら実施することができます。研修中に話を伺った方は、自分がどの方向に行こうか悩んでいるときにこの制度を受けて、自分のやりたいことが見つかった、と生き生きと話していました。

ドイツは福祉系や環境系の人材育成を国を挙げて行なっています。日本にそのような制度はまだ活発に動き始めていませんが、日本の若者も同じように将来に悩み迷っています。

制度をつくることも受け入れることも簡単なことではありません。組織が FOJ 制度の受け入れ先となれる許容量があるかどうかも重要な視点になってきます。研修生の受け皿になるということは、人材育成に関わる人を配置することになるので、新たな負担になることも考えられます。ただ私は若者支援は国家的な問題でもあるので企業の CSR や行政の協力のもと、仕組みを導入すべきだと思います。

## (2) 情報集約の場

現在日本にも多くの環境 NPO が存在しています。法人格をもっている NPO は内閣府のデータベースに集約はされていますが、もっとアクティブに NPO 側から情報を発信できる場所があっても良いのではないかと考えます。特にこのドイツ研修を終えたメンバーが在籍する一般社団法人日本環境 NPO ネットワークでうまく協力し合い、情報を広く多く公開していくことも重要なことだと思います。

## (3) NPO の連携や統合

各団体が目的達成していくには継続的に安定した資金が必要です。もちろん各団体が資金調達を行い、マンパワーをつけていくことは必要ですが、環境というテーマで事業を行っていくと活動に広がりをもつ団体も多いと思います。組織の目指すべきところが同じ方向を向いているのであれば、NPO であっても連携や統合をしていくことも今後必要になってくるのではないのでしょうか。人から受け継ぐことはとても難しいことですが、経験と実績をうまく引き出しながら形をかえていくことは、過去から学び未来へつながるひとつの選択肢であると考えます。

## ③ 全体を通しての感想

この研修の開始時に私は 3 つの視点を習得したいと考えていました。

- (1) 自分から今関わっている人の意識を変えられるような新しい提案力
- (2) 現在の状況を冷静に判断できる分析力
- (3) 過去を知り、今を学び、未来へ繋ぐ伝承力

ドイツの様々な主体の方々からこの 3 つの力を学び、いかに日本へ持って帰り、どのように自分の事業から日本に合った「人の意識を変え、組織を変え、国を良くする人づくり」への行動を起こせるかを考えていました。

ドイツの講師の皆様から学ばせていただき、ディスカッションで私に腑に落ちた答えは

「提案力を持つには夢を持つこと」、「分析力は多くの事例を知ること」、「伝承力は尊敬と信頼から生まれる」ということです。情熱をもって戦略的に活動が続けることが、いかに人を惹きつけるかを見せつけられたように思います。

今、研修を終えて私は日本を「感謝の連鎖を生み出す」社会にしたいと思うようになりました。研修でお会いした講師や地域活動のボランティアの方に共通して情熱が感じられたのは「自分のやりたいことを実現できる場所を与えてもらっている」という感謝を持っているからだと感じました。また、NABUの支部の方々も活動があるのは地域で活躍して下さる方がいるからこそだと、相互に尊敬と感謝のをもっていることが伝わって来ました。今いる場所に感謝をし、信頼関係を築き上げることが地域で活動していく上で、何より大切なものだと思います。

同じように私の所属している団体も地域の方々に支えていただいている部分が多くあります。その方々からの声をもっと聞きだせるよう、各担当職員がコーディネーターとしての力をよりつけていくことが、まず第一にしなければならないことだと考えています。

人は早々に変わりません。組織も社会も早々変わるものではありません。それでも、誰かが「もっと良くしたい」と思い、諦めず動き続けなければそこには何も生まれません。職業としてNPOで働かせてもらっていること、様々な切り口から多くの人にお話できる機会があることに感謝し、それを作り上げてきた方々に負けずに情熱を持っていたいと思います。現状に維持するのではなく、少しずつでも良くなるように動くことが大切であると考えます。

私にとって日本とドイツは違う点も学ぶべき点もありましたが、共通点もたくさんありました。もちろん民主主義に根ざした議論の多さであったり、市民活動の大きさはまだまだ遠く及びませんが、ドイツから学び日本人らしい方法で市民活動を活発にさせたいと思います。